

ドイツと日本のオリンピック・ムーブメント Germany and Japan in the Olympic Movement

講演者 ミヒャエル・クリューガー

Michael Krüger

(ミュンスター大学 スポーツ科学部教授)

平成27 (2015) 年12月10日 (木) 14:45~16:15

東洋大学白山キャンパス 6号館6209教室

報告者 谷釜尋徳¹⁾, 尾川翔大²⁾

本講演会は、東洋大学ライフデザイン学部主催の「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント推進教育プログラム」の一環として開催されたものである。クリューガー氏の講演は英語で行われ、日本語への逐次通訳がなされた。以下の報告は、通訳の内容に基づいてまとめているため、講演者の意図を正確に汲み取れていない箇所があり得ることを断っておきたい。また、文中の章タイトルは、報告者が便宜上付け加えたものである。

1. クーベルタンとオリンピック・ムーブメント

現在行われているオリンピックは、イギリスの歴史家エリック・ホブズボーム (Eric John Ernest Hobsbawm) の言葉を借りれば、ヨーロッパにおける「伝統の発明」の一つであろうかと思えます。このオリンピックという発想は、フランス人貴族のピエール・ド・クーベルタン (Pierre de Frédy, baron de Coubertin) 男爵によって具現化されました。クーベルタンは、アメリカを含む西欧の文明国には、裕福で教養のある素晴らしいス

ポーツマンたちがいて、彼らはギリシャの古代オリンピックに似たクーベルタンの国際的なスポーツ競技会の構想を支持していることを知っていました。世の中には様々な紛争や戦争がありますが、古代のギリシャ人がオリンピックの時には戦時中でも武器を置いてスタジアムで競い合う準備をしたように、4年に1度はスポーツをするために世界中から集まる機会を作りたいと彼は思っていました。

クーベルタンがこのような構想を抱いていた当時は、西欧列強国がそれぞれ国家主義、植民地主

1) 東洋大学スポーツ健康科学 (白山キャンパス) 研究室 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

2) 東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科

義、あるいは帝国主義の下、いかに世界の中心に躍り出ることができるかを競っていた時代でした。1897年のドイツ議会で、ドイツのベルンハルト・フォン・ビューロー（Bernhard von Bülow）首相が伝説的なスピーチの中で述べたように、各国とも世界で最高の地位を得て優位に立つために戦っていたのです。西欧諸国は、貿易面や産業面、そしてスポーツを含む文化的な面でも互いに競っていました。

この当時、ドイツやスウェーデン、オランダ、ポーランド、チェコなどでは、それぞれ体操競技が行われ、大会も開かれていました。各々トウレンやジムナスティック、ソコルなど、様々な呼び方がありました。しかし、それよりもイギリス版のスポーツ競技会であるオリンピックが一つのモデルとして世界中に普及することになります。ただし、そこには、心身を鍛練してその成果を競い合うという、アジアの身体文化は含まれていませんでした。

クーベルタンは、オリンピックを西欧諸国にとどまらず、世界中の多くの国々に広めたいと思っていました。そこで彼は、1908年の第4回ロンドン大会が終わった段階で、駐日フランス大使のオーギュスト・ジェラル（August Gérard）に、IOC（国際オリンピック委員会）のメンバーに加わってもらえるような日本人を紹介してほしいと要請しました。

当時の西欧諸国の多くが植民地を持っていましたが、日本はその支配下にはないアジアの独立した国で、世界に向けて自らの文化や経済を開く準備が整っていました。その歩みは、19世紀末の明治時代から始まっています。ただし、当時の日本はドイツのような西欧諸国をお手本に、さらなる近代国家となるべく奮闘していたことも覚えておく必要があります。日本は議会制を導入していましたが、その頂点に立つのは天皇陛下でした。当

時の日本は、アジアでいかに覇権を握ることができるかを模索していましたし、1910年には韓国を支配下におさめて、西欧諸国と同じように植民地政策を押し進めていきました。

2. 嘉納治五郎とオリンピック・ムーブメント

ジェラル駐日大使は、フランス公使も務めた日本の外交官本野一郎の助言の下、東京高等師範学校の校長であった嘉納治五郎にアプローチし、IOCのメンバーに就任してもらえるように頼みました。この東京高等師範学校とは、今でいう筑波大学です。

嘉納治五郎は柔道の創始者として知られる人物ですが、彼は講道館という柔道を学ぶための道場を1882年に設立しています。彼が生み出した柔道とは、日本の伝統的な武術を様々なかたちで組み合わせた新しいものでした。

嘉納は、ジェラルからの依頼の内容について、1937年に『中等教育』という雑誌に寄稿しています。ジェラルとの会話は「私の友人クーベルタンのためにお話しします。」という言葉から始まったそうです。当時はオリンピックにアジア諸国からの参加がないだけでなく、IOCのメンバーにもアジアの代表者がいないことをジェラルは嘆き、「嘉納さん、あなただったらオリンピックが分かるでしょう。IOCのメンバーになってもらえませんか？」と、最後にお願いました。

嘉納はこの依頼を了承します。そして、1909年にベルリンで開かれたIOC委員会に出席して、正式にIOCのメンバーとして迎え入れられました。日本人の嘉納が、IOCという国際的な組織の一員になったのです。こうして、次回の1912年のストックホルム大会と1916年に予定されていたベルリン大会に、日本人選手が参加できる道が拓かれました。しかし、第一次世界大戦が勃発したために、1916年の大会は中止となり、ベルリン大会

の実現は20年後の1936年に持ち越されています。

嘉納の伝記をドイツ語で書いたアンドレアス・ニーハウス（Andreas Niehaus）は、嘉納とクーベルタンに共通点があることを指摘しています。それは、2人とも教育者であったこと、そして、それぞれの国の伝統的な体育を変えていきたいと願い奔走していたことです。クーベルタンはオリンピックスポーツによって、嘉納は柔道によって、それを達成したいと考えていました。両者とも、体育・スポーツを通じて国を強くしたいという志を持ち、それは心身の鍛錬になるばかりか、若者の道德教育にも大きく寄与すると信じていました。

クーベルタンは国を代表する教育者で、オリンピックを国際化させようという発想がありました。この点は、柔道の国際化を目指した嘉納と共通しています。しかし、嘉納はオリビズムの国際化のみならず、それがいかに人類の普遍的な価値になり得るかということにも目をつけていました。ですから、オリンピックが単純にスポーツの発展のためだけではなく、国々の友好関係を築くうえでも重要であると力説していたのです。

1912年、嘉納はストックホルム大会に日本人選手団を初めて送り込みましたが、その次に彼がなし遂げたかったのは、日本の武道である柔道と剣道をオリンピック種目にすることでした。

嘉納治五郎がオリンピックの発展にとって重要人物であったことに疑う余地はありません。彼は、日本的な身体文化を西欧諸国に紹介し、日本国内でも体育・スポーツの発展に必要な施設や組織を作っていました。これが、国際的なオリンピック・ムーブメントに合致した取り組みでもあったのです。何より、それまでは西欧諸国のみで推進されていたオリンピック・ムーブメントをより世界中に拓かれたものにした点でも、彼は大変な功労者だったと思います。

嘉納が西欧諸国以外からはじめてIOCメンバーに就任したことで、オリンピックは新たな思想を採り入れることに成功しました。その代表例が柔道です。オリンピックは柔道という普遍的な身体文化の導入によって、「武士道精神」を手に入れたのです。

今や武士道は、様々な競技で規律規範としてしばしば持ち出されるようになりました。武士道は「日本の魂」と表現されることもあります。親日家のハイコ・ビットマン（Heiko Bittmann）によると、武士道には日本やアジアならではのフェアプレー精神が表れているそうです。武士道は日本の侍文化に根差していますが、それだけではなく、伝統的な神道、仏教、儒学などの要素も採り入れられています。

武士道はいかに生きるかというアジアならではの哲学ですが、それに対してオリビズムは、理想主義的な要素をもったヨーロッパ的な考え方です。また、武士道精神には、人間形成のためにいかに日々鍛錬するかという道德規範の意味も含まれ、これは現代のオリンピック教育に結びつくものだと思います。

3. 幻となった日本でのオリンピック開催

嘉納はできるだけ早期に、日本でオリンピックを開催しようと尽力しました。彼は1932年にロサンゼルスで開かれたIOC委員会で、東京招致について説いています。そして、1936年のベルリンのIOC委員会で、第12回オリンピック大会（1940）の東京開催が決定しました。その際、オリンピック種目の1つとして柔道が採用されています。さらに、1938年のカイロのIOC委員会で、第11回冬季オリンピック（1944）の開催地に札幌が選ばれました。

しかし、その日本への帰路で、嘉納治五郎は帰らぬ人となります。それは、「オリンピックの

父」と呼ばれたクーベルタンが亡くなった翌年のことでした。

嘉納治五郎は日本の「ミスターオリンピア」ですが、ドイツにも同じように「ミスターオリンピア」がいます。1936年のベルリン大会のオーガナイザーであったカール・ディーム (Carl Diem) です。彼はオリンピックの発展を語るうえで非常に重要な人物です。

カール・ディームは日本を2度訪問しています。初めて日本を訪れたのは1929年でした。この頃彼は、1936年のベルリン大会招致に向けて活動しており、ドイツの陸上競技のコーチであったジェセフ・ワイツァー (Josef Waitzer) を同行させています。

1955年、ディームは2回目の訪日を果たしました。この頃、彼はかなりの高齢でしたが、ドイツ体育大学ケルンの創設者になっていました。

1936年のベルリン大会は、日本にとって特に重要な大会でした。というのも、その次の1940年にはオリンピックの東京開催が決まっていたので、このベルリン大会は様々な意味で東京大会の参考になっていたからです。

当時のIOCメンバーのなかには、日本人の副島道正がいました。彼は東京大会の参考にすべく、ベルリン大会をくまなく調査します。副島はベルリンの選手村に感銘を受けますが、東京大会でも選手村を建設する計画がありました。

日本に来るために、海外の選手たちは高額な渡航費を払いますので、大会期間中の宿泊費をできるだけ抑える必要がありました。また、選手村が世界中の選手が集まる国際交流の場となることは、オリンピズムにも合致していました。当初の計画案では、都心から10kmほど離れた多摩川河川敷に選手村を建てる予定でしたが、その翌年、駒沢のオリンピックスタジアムの近くに建設予定地が変更されています。スタジアムと選手村をト

ンネルで結ぶ計画もありました。また、その4年後に開催予定であった札幌の冬季オリンピックでも、選手村を建設する案が出ていました。

残念ながら、この計画は水泡に帰してしまいました。それから起こる第二次世界大戦を含む戦争によって、日本は1938年に夏季・冬季両方のオリンピックを返上したからです。その背景には、1937年に勃発した日中戦争がありました。結局、嘉納が夢見た日本でのオリンピック開催の実現は、それぞれ1964年(東京)、1972年(札幌)を待たねばなりませんでした。

4. ドイツと日本のオリンピック復帰までの道のり

第二次世界大戦直後のオリンピックは1948年に行われていますが、この大会にはドイツと日本は招待されていません。「オリンピック・ファミリー」の中に戻るまでの道のりは、ドイツと日本双方にとって大変険しいものでした。いずれも敗戦国でしたし、戦争の責任者であると見なされていたからです。この段階で、オリンピック・ムーブメントはどん底の状態でした。1940年と1944年の大会は中止に追い込まれましたが、その原因は結局、ドイツと日本という帝国主義国家によって引き起こされた戦争にあったのです。しかし、両国ともに相当な犠牲を払っています。日本は世界で唯一の被爆国となり、ドイツは連合軍によって東西に分断されてしまいました。冷戦体制の下、一方は「鉄のカーテン」の中の国となり、もう一方は西側の国となりました。

戦後のIOCは、新たな戦略を打ち出していく必要がありました。その一つは、プロスポーツとの融合でした。それ以前にも、ソ連が事実上のプロ選手を出場させようとする動きはありました。戦時中はトーンダウンしていたこの問題を、IOCは再考しなければならなかったのです。IOC会議

では、数回にわたってソ連の参加問題が議論されました。当時の主要な IOC メンバーは反共産主義者でしたが、1948年のロンドン大会とサンモリッツ大会にはソ連を招待しています。オリンピック憲章では、大会に参加するには各国のオリンピック委員会 (NOC) の承認を必要としましたが、それとは違う動きをしていたのです。

ソ連は結局、この招待を拒否します。しかし、IOC は新たなオリンピック・ムーブメントが世界中のプロ選手に拓かれたもので、オリンピック・ファミリーが西ヨーロッパや北アメリカの紳士だけのクラブではないと示すことに成功したと実感していました。

IOC には、ソ連をオリンピック・ファミリーの中にいま一度迎え入れたい意向がありました。そこで IOC は、当時副会長であったアベリー・ブランデー (Avery Brundage) をソ連に派遣します。彼は、ソ連のスポーツ界が政府の強い圧力を受けていないのか、そしてソ連のスポーツ選手が本当にアマチュアであるのかを調査しました。答えは明白でしたが、ブランデーは何としてもソ連に戻ってきてほしいと望んでいたために、いずれも問題なかったかのように信じるふりをしたそうです。

すでに述べたように、ドイツと日本は1948年のロンドン大会には呼ばれていません。その公式的な理由は、両国に NOC やそれに類する組織がなかったことにあったかもしれませんが、おそらく IOC が新しいイメージをオリンピックにもたらしたかったことが本当の理由ではないかと思えます。そのためには、両国を無条件にオリンピックに戻すわけにはいかなかったのです。

この問題の解決を任されたのはロンドン大会 (1948) オーガナイザーのデヴィッド・バーリー卿 (David aburghley) でした。彼は日本にいたダグラス・マッカーサー (Douglas MacArthur) 元帥

とドイツにいた英国軍司令官のブライアン・ロバートソン (Brian Hubert Robertson) に相談して、両国のオリンピック参加の是非を問うています。両者ともに、ドイツと日本をオリンピックに参加させることを勧めました。

マッカーサーは、アメリカの IOC メンバーのガーランド (John Jewett Garland) に書簡を送っています。この書簡の中で、マッカーサーは日本のオリンピック復帰を強く推奨しています。日本の有力なスポーツ選手たちがオリンピックへの参加を熱望していて、彼らは信頼できる選手団を組織できる確証があると訴えたのです。マッカーサーは、平和的で文化的な国際交流のためにも、日本がオリンピックに復帰することは有意義であるとして、1952年のヘルシンキ大会への日本の参加を支持しました。ついにドイツと日本はオリンピックへの復帰を許され、ヘルシンキ大会に選手団を再び送り込むことができました。

しかし、日本でオリンピックを開催するまでには、そこからさらに12年もの歳月を要しています。1964年の東京大会は、アジアの伝統に根ざした柔道をオリンピック種目に採用し、日本でオリンピックを開催するという嘉納治五郎の夢が実現しただけではありません。東京大会の開催は、日本が近代的で工業化された真の民主国家として国際社会に迎え入れられた、その時でもあったのです。これは、西ドイツが1972年にミュンヘン大会を開催した時と類似しています。

5. オリンピックに革命を起こした日本の体操競技

日本人選手のオリンピック参加は、ドイツの体操競技の伝統に大きな影響をもたらしてきました。ドイツは体操競技の発祥の地として知られていますが、世界の体操競技を今日のレベルまで引き上げたのは日本人選手だと思えます。1936年の

ベルリン大会では、ドイツ人選手がこの競技で金メダルを獲得しましたが、その近代的で芸術的な発展に寄与したのは日本人選手でした。多くの有名な選手がありますが、例えばメダリストの中では1956年・1960年の小野喬選手、1964年の遠藤幸雄選手、1984年の具志堅幸司選手らがいます。近年で有名なのは、やはり2012年のロンドン大会で金メダルに輝き、2015年のグラスゴーの世界選手権でもチャンピオンになった内村航平選手ではないでしょうか。

また、団体では1972年のミュンヘン大会の加藤沢男選手、監物永三選手、中山彰規選手、塚原光男選手らの活躍が忘れられません。彼らの成功の裏には日々の鍛錬がありましたが、これは選手本人の努力のみならず、人間の動きを詳細に分析して指導する、革新的な方法を生み出したコーチやスポーツ科学者による仕事の成果でもありました。多くの体操選手、コーチ、教育者がこの成功をサポートしました。その1人として、金子明友教授（筑波大学名誉教授・元日本女子体育大学学長・国際体操連盟名誉メンバー）のお名前を挙げておきます。

日本の体操選手のパフォーマンスは、オリンピックにおける勝利以上に価値あるものでした。彼らは優雅さと力強さを融合させた芸術的な妙技によって、新しい体操のスタイルを生み出したのです。これを社会文化的あるいは哲学的な文脈からみると、日本の体操選手は、ヨーロッパの身体運動に禁欲主義や美学といった日本的な精神を混ぜ合わせたと言うことができます。近代的なスポーツの実践を通して、文化的融合というオリンピックの夢を現実のものとしたのです。体操史家のヨーゼフ・ゲイラー（Josef Göhler）が言うように、日本人の体操選手は、男性であれ女性であれ「オリंपイズムを具現化している」のです。

【質疑応答】

6. ロシアのドーピング問題

質問者1：東洋大学の英語コミュニケーション学
科教授の佐藤節也と申します。本日は、大変興味
深く有益なお話をありがとうございました。今
回、オリンピックについて歴史的な視点を絡めて
お話いただいたことは、教育という意味合いから
も有意義であったと思います。

ここで、タイムリーな質問をします。これは、
ご自身の研究テーマでもあるかと思いますが、最
近のドーピング問題、特にロシア選手団のドーピ
ング問題についてお考えを伺います。ロシアはど
のようにすればこの問題を解決できるのか、そし
てこれから2016年のリオ・デ・ジャネイロ大会に
向けてどのようになっていくのかについて、お答
えいただけますでしょうか。

クリューガー：このドーピング問題は、オリンピ
ック・ムーブメントや広く一般のスポーツ活動に
対する挑戦だと思います。ドーピングの歴史を振
り返ってみると、人々の考え方に違いが生じたの
は冷戦がきっかけでした。世の中が「鉄のカーテ
ン」を境に東西のブロックに分断されてしまった
からです。

東ドイツやソ連など東側の共産主義国では、肉
体強化のために薬を使ってきた歴史があります
が、実は西側の西ドイツやアメリカでも、薬を
使った禁断の肉体強化法が用いられたことがあり
ます。確証はありませんが、日本や中国でも同じ
ような歴史があったのかもしれませんが。ドーピ
ングが、この国ではこれから先起きないのか、今
起きていないのか、この競技については起きている
のか、起きていないのか、ということは、結局
のところ断言できません。

ドーピングには、定義の問題があると思いま

す。パフォーマンス向上の手段はいつの時代にも存在しました。古代のスポーツ選手でさえ、そのために特別な栄養を摂取していました。しかし、近代的なドーピングとの違いは、パフォーマンス拡張の特定の方法が、各種のスポーツ連盟やIOCの規則、そしてWADA（世界アンチ・ドーピング機関）によって禁じられていることです。ドーピングは、アンチドーピングと表裏の関係にあります。何をもってレギュラーととるか、何をもってイレギュラーととるかは、各々の社会の価値観によっても異なるので非常に難しい問題です。

ドーピングの定義づけがなされたのは、1950年代～1960年代です。最初の段階では、オリンピック憲章や各種スポーツ連盟の規約でも「薬物の投与を禁止する」などといった文言に止まっています。しかし、今では膨大な禁止薬物のリストが存在します。ドーピングは、今日のスポーツ界で最も注意すべき難しい問題だと実感しています。

ただし、冷戦時代のドイツでは、東西でその考え方がまったく違ったことはつけ加えておきたいと思います。全体主義、社会主義、共産主義のブロックであった東ドイツでは、国ぐるみでドーピングが行われていました。東ドイツの政府は、自由主義社会で推奨されているオリンピック・ムーブメントやスポーツの考え方そのものを否定していたため、禁止薬物を摂取するように選手やコーチに要求したのです。今日のロシアは、まさに当時の東ドイツと同じ状況にあったと思います。

アメリカや日本など自由主義を謳歌する西側諸国でも、ドーピングをした実態があったかもしれません。しかし、仮にそうだとすると、そこに国は決して関与していません。もしかしたら、起きているのを知っていながら目をつぶっていた政治家がいたかもしれませんが、国ぐるみでのドーピングは行われていないところに、東側諸国との大きな違いを見出すことができます。

質問者1：ありがとうございました。

7. オリンピックと平和主義

質問者2：東洋大学大学院生の尾川翔大と申します。本日は、第二次世界大戦とオリンピックの開催といった話がメインだったと思います。現代においては、皆さんもご存知のように先日フランスで起こった問題（パリ同時多発テロ事件）も世界に知れ渡っているわけですが、古代ギリシャのオリンピックには「エケケイリア」という休戦協定がありました。その理念や、現代における実現の可能性について、どのようにお考えでしょうか。

クリューガー：実は昨日、朝霞キャンパスでオリンピックとオリンピック教育についての講演を行いました。そこで私は、オリンピックにおける最も大切なメッセージのひとつが「平和」であると言いました。スポーツには互いに競い合う仲間いますが、全員がひとつのチームとなってこれから先を歩むことが、世界平和のための強いメッセージになると説いたのです。世界中で様々な戦争や紛争があります。先日、フランスでテロがありました。テロをどのように乗り越えていくのかということは、常に考えなくてはなりません。

テロという行為は、オリンピックにどのような影響を来してしまうのでしょうか。その象徴が、残念ながら1972年のミュンヘン大会ではなかったかと思います。2020年の東京大会の時には、こうした問題に頭を悩ませなくてもいい状態になっているのが理想ですが、やはり、どのように安全を確保するのかということは、これから先のオリンピックにとって尽きない課題だと思います。

先ほどお話したドーピングはスポーツ界に内在する問題ですが、テロはオリンピックに対する外側からの挑戦という意味で深刻です。「平和」や「平和の維持」は、オリンピックの中核にある絶

えず発信すべきメッセージです。

8. オリンピック招致の是非

クリューガー：今度は、私から皆さんに質問です。皆さんは、2020年の東京オリンピックを前向きに楽しみにしていますか？

皆さんもご存知かもしれませんが、東京大会の次に来る2024年のオリンピックについて、ハンブルグで招致活動をするか否かの住民投票をしたところ、反対する声のほうが多数でした。オリンピックを批判する人たちも、ドイツには相当います。2024年のドイツでのオリンピック開催の夢は、その段階でついでてしまいました。

ここで票をとってみたいと思います。2020年の東京オリンピックについて、賛成の方は手を挙げてください。(多くの聴衆が挙手) それでは、反対という方は手を挙げていただけますか。何人かおられますね。お一人、理由を伺ってもよろしいでしょうか。

男性A：特に今、新しい国立競技場のお金をどうするのかということに対して、まだかなり曖昧な部分があり、国はいくら出すのか、都民が費用を負担するのかという問題が解決されないまま進んでいると思っています。そういう部分が気になっているので、反対に挙手しました。

クリューガー：ハンブルグの住民投票で、反対票が多かった理由がまさにそこでした。

結局のところ、オリンピック招致に関する反対意見の大半が、金銭的なつけがどこに回ってくるのかという点に集約されます。こんな大がかりなイベントをしているだけのゆとりがあるのか、ほかに解決しなくてはならない様々な問題が、世界中あるいは開催国の中にあるのではないかという意見が、多勢を占めていると思います。

特にご質問がなければ、以上で講演を終わりにします。

『さようなら、どうもありがとう。』（講演者が日本語で発声）